

# 科学技術社会論とメディア論の協働に向けて

飯田 豊

インターネットを中核として情報環境の再編が不可避に進行している現在、情報技術とメディア、人間との望ましい関係をデザインしていくためには、メディアの送り手と受け手、情報技術の専門家と非専門家を媒介し、協働を可能にする対話の回路が不可欠である。ところが、科学技術社会論における「科学技術コミュニケーション」と、メディア論やカルチュラル・スタディーズの薫陶を受けた「メディア実践」は、互いに問題関心を共有しつつも、まったく異なる学問的パラダイムのもとで今日まで展開しており、その理論的／実践的接合が急務である。そこで本稿では、このふたつの思潮の接点を歴史社会的に見出し、包括的な概念枠組みを構想することの重要性について論じた。

【キーワード 科学技術社会論 メディア論 科学技術コミュニケーション メディア実践】

## 1. はじめに

日常生活に埋め込まれたテレビ試聴を空間論的に分析することで、それが階級やジェンダーなどをいかに媒介し、個人や家族のあり方を規定しているのかを論じたロジャー・シルバーストーンは、1980年代以降、テクノロジーの「馴化 (domestication)」あるいは「領有 (appropriation)」といった概念について考察を深め、メディア論におけるオーディエンス研究の射程を広げた (1)。

それに対して、技術哲学者のアンドリュー・フィーンバーグは、カルチュラル・スタディーズの視座をメディアの技術論に適用したシルバーストーンたちの研究の有効性を認めながらも、そこで導入されている「馴化」という概念が、生活者の主体性を妨げる「適応」や「慣れ」に特権を与える危険性を指摘する。保守的な意味合いを含んだ「馴化」という用語は、公共的問題として主題化された事例には相応しくないとして、その限界をフィーンバーグは批判するのである。「オンライン・コミュニケーションのように、ユーザーが外部から技術を持ち込むのではなく、その技術をつうじて公共的世界で行為する場合にはどうだろうか。原子力のように、家庭には関連する行為者がまったく置かれていない技術の場合はどうだろうか。保守的な意味を含んだ『馴化』は、これらの事例にふさわしい用語だろうか」。その結果、フィーンバーグの議論の焦点は、近代的な科学技術に根ざす非民主的な権力構造に対する挑戦として、生活者の主体的な関与にもとづく「民主的な合理化」の可能性に向かう (2)。

このフィーンバーグの批判は、カルチュラル・スタディーズの薫陶を受けたメディア論の核心と、技術哲学における議論の前提が互いに断絶していることを、あからさまに象徴して

いる。技術哲学がこれまで、あくまで科学技術の「公共性」に比重を置いた議論を深めてきたのに対して、物質文化としてのメディアに照準を向けてきた研究群は、レイモンド・ウィリアムズの「移動する私生活化 (mobile privatization)」といった分析概念に象徴されるように、これまでどちらかといえば、個人の私的領域の変容 (それともなう公的領域の変容) を主たる考察対象としてきた (3)。ウィリアムズが明確にその限界を批判したのが、アメリカの社会心理学的なマス・コミュニケーション研究の伝統であったように、カルチュラル・スタディーズのメディア研究が、マスメディアの「公共性」を自明視してきたマス・コミュニケーション論やジャーナリズム論の枠組みを批判し、その限界を乗り越えてきた経緯もあることから、こうした乖離に拍車がかかっているといえよう。

だが、学問的パラダイムにおける断絶とは裏腹に、インターネットを中核として情報環境の再編が急速に進んでいる現在、社会における情報技術／メディアの境界はますます曖昧になっている。たとえば、2011年の完全地上デジタル化を目前に、放送局が番組制作から電波送信までを一手に担い、家庭の受像機でいっせいに試聴されるという、テレビの垂直統合モデルは既に瓦解しつつあり、インターネットやケータイをはじめとする情報技術と否応なく融合していることは、周知の通りである。また、インターネット上にはブログや SNS をはじめ、さまざまなウェブサービス群が無数に存在しており、ネット自体をひとつのメディアとして画一的に捉えることは困難になってきた。突出したインターネット・サービスを背景に、不断の多機能化を続けているケータイも同様である。

## 2. 誰が社会設計を担うのか ―社会工学的設計主義の課題を超えて

濱野智史はネットに対して、あえて「メディア」という言葉を使わず、憲法学者ローレンス・レッシングによって広く知られるようになった「アーキテクチャ」(4) という概念を用いている。複数の人びとが何らかの行動や相互行為をとることができる一方、無意識に規制が作用する (実体をとまわらない) 「場」としてネットを捉えたうえで、多様なアーキテクチャ＝環境管理型権力のあり方を知ることによって、それらを活用した社会設計の可能性について前向きに検討するというのが、濱野の姿勢である (5)。こうして「メディア」という概念をあらかじめ捨象することによって、今日の日本における情報環境の総体 (=生態系) が描かれる。

ミシェル・フーコーを引き合いに出すまでもなく、近代社会がこれまで、「規律訓練型権力」によって規制を個人に内面化させ、学校、病院、工場、監獄など、あらゆる場において秩序の維持を目指してきたのに対して、アーキテクチャが可能にするのは、無意識のうちに技術的ないしは物理的に規制を働きかけ、個人の自発性を引き出す「環境管理型権力」である (6)。

このような状況認識を踏まえて、情報技術と人間との望ましいあり方を議論する場合、実存的な倫理主義ないし啓蒙主義が後景化する代わりに、社会工学的な知、卓越的な設計主義がせり出すことになる。

だが、社会工学的な設計主義の重要性を掲げる先行研究は、アーキテクチャという新しい概念を踏まえた現状分析にとどまっており、「いったい誰が社会設計を担うのか」という重要な問いが宙吊りになっている。たとえば、『思想地図』3号（特集：アーキテクチャ）に掲載された、「アーキテクチャと思考の場所」と題する共同討議においては、この問いをめぐる論者の認識の違いが浮き彫りになっている<sup>(7)</sup>。ここで宮台真司も引き合いに出しているように、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックの議論にしたがえば、今日の高度技術社会におけるリスクは、確率計算にもとづく合理性評価の対象になりえないため、社会工学的な意思決定が合理性を担保できない。それゆえ、共同体的な自己決定にもとづくローカルな「サブ政治」が重要になってくるのではなかったか<sup>(8)</sup>。

あくまで筆者は、社会工学的な知の前景化を踏まえつつも、情報環境に人間が主体的に関与する道筋を探るという立場を採りたい。

従来こうした実践的機制を練り上げてきたのが、科学技術社会論における「科学技術コミュニケーション」と、メディア論やカルチュラル・スタディーズの薫陶を受けた「メディア実践」のふたつであろう。情報技術とメディア、人間との望ましい関係をデザインしていくためには、その生産と消費の相互作用、専門家と非専門家のコミュニケーションが不可欠である（＝科学技術社会論の認識枠組み）。ひとつの情報技術をめぐる認識は、それぞれ独自の規範に従う社会集団によって異なっており、その諸勢力のせめぎあいのなかからメディアとして展開していくからである（＝メディア論の認識枠組み）。

しかし今日、情報技術のブラックボックス化にともない、そうしたコミュニケーション回路を構想することは難しく、メディアの送り手と受け手、情報技術の専門家と非専門家が、それぞれ大きく乖離しているのが現状である。さらに冒頭で述べた通り、科学技術社会論とメディア論は互いに問題関心を共振させつつも、それぞれ異なる学問的パラダイムのもとで今日まで展開しており、互いに関係が乖離してしまっている。そこで本稿では、「科学技術コミュニケーション」と「メディア実践」という実践研究の潮流を素描することによって、双方を包括する概念枠組みを構想することの重要性を明らかにする。

### 3. 「科学技術コミュニケーション」の射程 —科学技術社会論における実践研究

科学は論理的に首尾一貫し、客観的な実在を反映した確証的知識であるという考え方と決別して、80年代以降の科学論においては、トーマス・クーンの『科学革命の構造』の強い影

響下で (9)、科学の社会的構成が論議されてきた。こうした動向は技術論とも深く関わりながら、科学や技術の「解釈の柔軟性」が論じられ、その「相対化」が (時として過剰に) 試みられてきた。

このような議論を踏まえて、さらに 90 年代の「サイエンス・ウォーズ」を経たことによって、科学技術をめぐる専門家と非専門家のコミュニケーションは、専門家の研究開発活動の成果を非専門家が理解するという送り手/受け手の関係——いわゆる「欠如モデル」——ではなく、研究開発段階から非専門家が、専門家共同体の意思決定や方向付けに参画していく相互作用的な関係が求められるようになってきた。たとえば、コンセンサス会議に代表される公共的討論は、専門家の見解を最大限参考にしながらも、非専門家が科学技術のアセスメント判断を下そうとする社会的意志決定の試みである (10)。近代的な科学技術の合理化のあり方と不可分に関わる、「健康」や「環境」に対する関心の高まりとともに、科学技術をめぐる社会的意志決定の場の創出は、今では科学論や技術論の実践的課題のひとつになっている (11)。70 年代のオランダにおける学生運動を発祥とし、「市民科学」の活動を専門的にサポートする「サイエンスショップ」の模索や、フランスの哲学カフェを発想の源とする「サイエンスカフェ」の興隆も、そうした実践のひとつである。科学技術の専門知識は本来、専門家共同体の評価機構によって生成、維持、展開されるものである以上、その専門主義と社会的公共性の結節点を、いかに構想するかが問われているのである (12)。

こうした動向には、いくつかの限界もある。第一に、非専門家に開かれた社会的意志決定に関する議論の多くは、近代的な科学技術に根ざした非民主性との対抗関係で捉えられる。したがって、宇宙科学や原子力開発に代表される巨大科学、公害問題や食の安全など、公共的問題として主題化されやすい科学技術のみが、科学技術社会論における議論の俎上に載せられることになる。それに対して、80 年代以降のメディア論が着目してきた、テレビやインターネット、ケータイといった、日常生活に根ざした情報技術のあり方を、専門家と非専門家が開かれた場で議論し、その可能態を追求していくコミュニケーション回路の可能性については、これまで十分に検討されてきたとはいえない。

そして第二に、科学技術に関する社会的意志決定の場を創出しようとする試みは、現在を起点として語られることがほとんどであり、その系譜はこれまで十分に考察されてはいない。たとえば、科学技術ジャーナリズムという営みの歴史はこれまで、科学技術の公衆理解や啓蒙活動という欠如モデルを前提に編まれてきたが、科学技術に対する非専門家の主体的な関与を働きかける実践活動という観点から、その歴史を再検証することもできるはずである。

科学技術社会論の領域において、専門家集団の内部構造や制度化の過程の解明については、既に優れた研究成果が挙がっている。また、科学者や技術者のあいだでの知識の伝達、継承、蓄積といったコミュニケーション過程についても、たとえば、ブライアン・ヴィッカリーが文明論的な歴史研究を展開している (13)。ただし、社会との相互作用論を踏まえた科学技術

コミュニケーションについては、コンセンサス会議やサイエンスカフェといった実験がようやく端緒についた段階であり、これから本格的に取り組まれるべき課題といえる。

#### 4. 「メディア実践」の射程 —メディア論における実践研究

メディア論やメディア史において社会構築主義の視座が共有され、今日のメディアのあり方を相対化する知見が蓄積された果てに、メディアの可能的様態を構想するための場を創出しようという実践研究が、近年さまざまなかたちで試みられている。かつてラジオの黎明期を跡付けることを通じて、放送の産業化に先立つアマチュアの営みをまばゆく描いてみせた水越伸が(14)、やがて後年、メディアリテラシーという概念を媒介として放送の送り手と受け手を結びつけ、表現と受容の循環を引き起こすための実践研究を展開するようになったことは、大いに示唆的である。たとえば、水越たちはこれまで、ローカル放送局と地域の子どもたちによる番組制作の試みを継続的に実施している。専門家が放送の仕事を分かりやすく伝えることが目的ではない。送り手と受け手が番組制作を通じてリテラシーを学び合い、表現と受容が循環する対話の回路を構築することがねらいである(15)。このプロジェクトには2008年以降、筆者も参加している。

そのうえで、メディアリテラシーは近年、単にマスメディアの情報を批判的に読み解くだけでなく、送り手と受け手のあいだに対話の回路を構築し、表現と受容の循環を再生する概念へと展開しており、現代のメディア社会を主体的にデザインしていく思想を内包する視座として捉えることができる(16)。

その中心的な手法のひとつが、ワークショップという方法論である。ワークショップは一般的に、言語化しにくい知識や技能を身につけるための参加体験型の学習方法として知られており、メディアリテラシーを身体的に学ぶための教育実践にも活用されている。また、企業研修やまちづくりにおける合意形成や、現代美術や演劇といった創作活動の手段として、ワークショップが設定されることもある。それに対して水越は、日常生活のなかで無意識的に染み付いた、メディアをめぐる価値観、慣習的な身体技法、言語化されない感覚などを刹那的に異化し、そのオルタナティブなあり方を構想するための知的エンジンとして、これを位置付けている。

「たんに実践的、学習的なものではなく、批判的、分析的な働きをも併せ持つ」という「批判的メディア実践」(17)を提唱する水越らを中心に、メディアの批判理論を踏まえた創造的な実践研究は各地で進められているが、その成果の蓄積や共有、方法論の体系化といった作業は、まだ端緒についたばかりといえる。

## 5. 科学技術社会論とメディア論の協働に向けて

いずれの領域においても 00 年代においては、産官学連携、国立大学法人化といった時流にも否応なく後押しされるかたちで、社会構築主義的な分析にもとづく相対主義を受け入れ、そうした批判的視座を担保したうえで、あえて現場にコミットする実践的な態度が重視されるようになってきている (18)。その点において、科学技術社会論とメディア論は互いに重なり合う展開を経ており、それゆえに同様の課題を抱えている一方、それぞれの学問的課題を相互補完しうる可能性を秘めているのである。

科学技術社会論とメディア論の複合領域を浮き彫りにする意義、その具体的な方法論について、本稿では三点の手掛かりを指摘しておきたい。

### 5.1 コミュニティ（共同体）概念の比較検討

第一に、このふたつの領域におけるコミュニティ（共同体）論の展開を比較検討することである。

科学社会学の始祖ロバート・マートンがいう「科学者共同体」の基本単位として、科学技術社会論に取り組む藤垣裕子は、従来しばしば着目されてきた学会やディシプリンではなく、科学者によるジャーナルの編集・投稿活動を挙げ、「ジャーナル共同体」という概念を提起している (19)。査読機構 (peer review) によって成立するジャーナルは、当該分野の業績認定の対象となるため、専門家共同体を駆動するメディアとなり得るからである。

共同体を駆動するメディアとはどういうことか。このことはメディア論の立場から次のように説明できる。コミュニケーション思想家のジェームズ・ケアリーは、コミュニケーションをメッセージの伝達過程とみなす通有的な見方を「伝達的コミュニケーション観 (a transmission view of communication)」と位置付け、こうした見方が社会一般においてはもとより、学問的にも支配的な観点であることを看破した。それに対してケアリーは、コミュニケーションを儀礼的な観点から説明する「儀礼的コミュニケーション観 (a ritual view of communication)」の重要性を強調し、メディアを、コミュニケーションを介して共同体を生成し、それを維持・展開させていく象徴作用の中心にあるものとして位置付けている (20)。ケアリーの視点を踏まえて、長谷川一は、「知のコミュニティとは、出版によって形成・維持・展開されてきたのであり、逆に出版はまた、そうすることで社会的な地位を獲得し、産業的な発展をとげるための足場を獲得した」と指摘している (21)。

また、メディア史の領域においてはキャロリン・マーヴィンが、19 世紀末のアメリカ社会のなかで電気技術者たちが専門性を獲得していく過程を、技術的な文書を読み書きする技能の共有にもとづく「技術リテラシー」や「テキスト共同体」といった概念を用いて分析して

いる。それは「誰が技術的な知の内側におり、誰が外側にいるのか、誰が語ることを許され、誰が許されないのか、誰が技術に対して権威を保持し、信用されていくのかといった諸々の点をめぐって折衝がなされていくひとつながりの抗争の場」に他ならない(22)。日本の科学技術ジャーナリズムの系譜については、科学史や技術史の伝統のなかで綿密な研究が蓄積されてきたが、こうしたメディア史の理論的進展を反映した歴史分析は皆無である。

たとえば、大正末期に創刊された『無線と実験』は当初、無線の魅力に惹かれた新中間層の青少年をはじめ、電気の専門家や通信省の技術官僚、知識人や文化人、そして無線に関心を抱く大衆による読者共同体を形成していた。それは単なるテキスト共同体ではない。ラジオやテレビジョンに関する公開実験を主体的に担い、新聞社や企業、ときには学校の子どもたちに技術指導をおこなうことによって、専門家のジャーナル共同体のように閉鎖的でなく、中間共同体としての「アマチュア」の理念と実践を練り上げていったのである。

ところが、『無線と実験』は戦後、度重なるリニューアルを経て、現在の「オーディオ総合技術誌」に落ち着いていった。その顛末が端的に象徴しているのは、日常的なコミュニケーションをめぐる技術的変容に立ち会うことから、より美学的な領域に限定した音楽環境を創造していくことへと、その射程を収斂せざるを得なかったことを意味している。このことは、吉見俊哉が「アマチュア」をめぐる問題系を、新しい音響テクノロジーが社会化していく初期の段階に遡って、音楽に焦点化される美学的な領域だけでなく、より日常的な会話や娯楽といったコミュニケーションの領域にまで拡大してみせた(23)ことと、ちょうど同一の事態を指しているといえよう。

## 5.2 「公開実験」の歴史社会学

科学技術社会論とメディア論を接合するための補助線として、「公開実験」という営みに焦点をあてるのが、第二の手掛かりである。

『無線と実験』が当初、ラジオやテレビジョンに関する公開実験を主体的に担っていたことは、既に述べた通りである。筆者はこれまで、無線技術の草創期における公開実験に焦点をあてたメディア史研究を展開してきた(24)が、その企図のひとつは、技術の専門家と非専門家を媒介する具体的な場として、公開実験という営みを捉えることにある。

レイモンド・ウィリアムズは、「出版を通じた書字から活字への発展、あるいは映画、ラジオ、テレビへと至る発展など、新しい『メディア』と見なされたものについての技術的側面に特化した研究」が、「往々にして一般的な生産力や社会関係・社会秩序から相対的に切り離されている」一方で、「オーディエンス」や「公衆」に照準する社会史は、「詳細な事実を集めはするものの、基本的に『消費』という観点からなされ […] より一般的な社会的組織の形式でもある消費の様式と、技術的であると同時に社会的な特定様式との、常に重要で、時

には決定的ですらある関係については理論的發展をなしえない」ことに懸念を抱いていた(25)。たしかに、装置が生産される局面に関心を向ける技術史的研究は、装置の「馴化」(26)や「近代的家庭」の変質(27)を焦点化するメディアの受容理論の優れた研究蓄積と、互いに乖離してしまっている。この二つの系統は、歴史記述の出発点にどうしても間隙が生じてしまうためである。

キャロリン・マーヴィンは、19世紀末における電氣的なメディアに関して、電気雑誌の言説や電気技術者のアイデンティティ、あるいは科学技術のスペクタクル的な展示に着目することで、「技術的変化に従属するのではない仕方で社会的な意味がつくり直されていく」過程を詳細に考察している。マーヴィンはその前提として、機器の普及に先立つ出来事がすべて、「中立的な境界域」として技術面の前史に分類されてきたことを鋭く批判している(28)。

19世紀末から20世紀における「公開実験」の多くは、博覧会や展覧会の催しの一環として実施されたものである。かつて技術史家の吉田光邦が博覧会の機能を歴史的に跡付けたのは、それが技術競争の最大の檜舞台であると同時に、大衆への啓蒙と教育の機会を提供していたからに他ならない。とりわけ当時は、企業の市場が国外に拡大していった時期にあたり、「世界の観客を相手とする万国博は、企業にとってはまたとない国際市場獲得の機会であつた。それは新製品・新技術の展示場」(29)であった。こうした視角にしたがえば、公開実験とは、新製品や新技術の展示からさらに進んで、その将来像を魅力的に示す舞台装置であり続けた。

しかしここでは、専門家から非専門家へ、あるいは国家や企業から大衆へと、一方的に知識を伝達する回路として、博覧会／公開実験が定位されている。言い換えれば、伝達されるべきテクノロジーが実体的に捉えられ、その知識を持つ者と持たざる者のフレーム、いわゆる「欠如モデル」が前提とされてしまっている。それに対して、吉見俊哉は『博覧会の政治学』において、「博覧会の歴史を何らかの客観的事実の発展史としてではなく、博覧会に集まってきた人々の社会的経験の歴史として捉え返すこと」(30)に関心を向けた。吉見の議論を敷衍すれば、公開実験もまた、すぐれて社会的に織り上げられたテキストに他ならず、さまざまな行為体によって構造化され、演出のされ方が条件付けられた複合的な編成体として人びとに経験されるものである。

新しい科学技術が動員される公開実験という舞台は、絶対的な価値が呈示される進歩や発見の場ではなく、それをめぐる諸集団の論理や利害、構想力が互いに拮抗した末に成立する場である。それは科学技術の社会的編制のあり方を反映するというよりも、むしろその重要な一部を構築しているのである。

技術開発の現場が、社会と初めて接触する公開実験という結節点に目を向けることによって、揺籃期の科学技術が、あくまでも揺らぎを孕んだままの状態において、社会のなかでいかなる意味付けがおこなわれたのか。揺らぎを孕んだ情報技術が披見される公開実験は、それを核とするメディアのあり方を規定していこうとする諸集団の欲望が結晶化された文化政



治的实践であって、その変遷を追うことは、単に技術的發展を跡付ける作業であるだけでなく、メディアの社会的な意味が作り直されていくダイナミズムに照準を向けることなのである。

### 5.3 中間共同体としての「アマチュア」

そして第三に、ここまで述べてきた議論の道筋を踏まえて、専門家と非専門家の中間共同体としての「アマチュア」をめぐる研究を再構築し、その限界を乗り越えることを目指したい。

吉見俊哉は『「声」の資本主義』のなかで、大正末期のアマチュア無線家のみならず、初期の電話ネットワークを差配した女性交換手や、いまだ国家的な電話網が浸透していない 50年代を通じて、全国各地の地域社会に普及していった有線放送電話の組織者たちを含めて、技術や芸術の専門家(=送り手)と大衆(=受け手)の中間に位置するような人びとを、広義の「アマチュア」と捉えている。新たに社会化しつつあった情報技術の、大衆的想像力のレベルにおける受容のされ方を、広義の「アマチュア」によって構成される文化の問題と絡めて把握することを通じて、「メディアそのものの媒介的で中間的な性格」、言い換えれば「それぞれのメディアを横断する形で作用していた技術的変容の力線」(31)を、現在の状況に直接つながる問題として浮き彫りにしたのである。

この本が上梓されたのは、「インターネット元年」と呼ばれた 1995年である。ここで吉見は直截的には言及していないものの、この頃から「アマチュア」に焦点をあてたメディア史はたいいてい、インターネットの行方と対照しながら論じられてきた。たとえば、デボラ・ポスカンザーはこの翌年、大正末期のアマチュア無線文化を分析することを通じて、より直截的に、80年代のサイバースペースにみられた価値観に議論を敷衍している。「日本におけるラジオ文化の進化は、最近サイバースペースで見られる諸変化とどこか以ている。[...]アマチュアの飽くなきチャレンジと実験、規制への反感、技術的発見と自己発見とのロマンティックな関連などは、ハッカーのサブカルチャーにも見られる典型的な価値観である」(32)と。

このようなメディア史研究の蓄積を敷衍することによって、「新しいメディアが登場したときにはさまざまな想像力が多様な社会領域から提示され、メディアは豊かな可能性を持って私たちの前に立ち現れようとするのであるが、ひとたび一つの姿が国家的、産業的に確立されると、それらの可能的様態のすべてが忘れ去られてしまう」(33)という定式が帰納的に導かれる。

だが、無線を国家が厳しく管掌するようになって以降、「アマチュア」という概念自体の決定的な変容を看過するわけにはいかない。

戦前から戦中期にかけて国家の厳しい管理下に置かれていた無線は、戦後になって、日本電信電話公社が主導する周波数帯の新規開拓によって、少しずつ規制が緩和されていった。

太平洋戦争の開戦とともに禁止されていたアマチュア無線に対しても、占領期が終わると、幅広い周波数帯の利用が認められるようになった。しかし、その代償としてアマチュア無線は、「もっぱら個人的な無線技術の興味によって行う自己訓練、通信及び技術的研究の業務」（電波法施行規則、1950年）とされ、この規定にもとづく趣味活動に収斂してしまう。それどころか、70年代にアマチュア無線連盟が発行した『アマチュア無線のあゆみ』では、この施行規定は「時間を越えて成立すると考える」とされ、アマチュア無線の歴史が過去に遡って修正されている。「大正末期に長、中波の送信の正式免許を持っていた発明研究所 […] の浜地常康氏、安藤研究所 […] の安藤博氏は共に営利を目的としていたから、すぐれた先覚者ではあるがアマチュアとはいいがたい」というのである(34)。その結果として、戦後におけるアマチュアの関心や活動の幅が規律的に狭まり、閉鎖的になっていったことは否めない。すなわち、アマチュアたちの活動は、ある時期まで無線技術の発展に関与していたにも関わらず、やがて「趣味」や「興味」であることが絶対的な規範として作動していくことによって、無線の商業利用や法制度に対する無関心へと必然的に帰着していったのである。

そのうえ、技術の秘匿が保証される半導体技術の急速な進展にともない、専門家と非専門家は決定的に峻別され、アマチュアや好事家が技術的次元で電気製品の筐体の内部に関与することは次第に困難になっていく。ICやLSIが導入された製品の登場にさいして、もはや電器屋や修理屋、アマチュアが箱の中を覗き込むことは期待されておらず、ごく一般の利用者には、専門家による研究開発の痕跡すら感じられないブラックボックスと化していったのである(35)。1969年の『トランジスタ技術』は、「『アマチュア』という言葉の意味するものが大きく変わってきて」おり、「職人芸的技術の積み重ねでは限界がありいつしか作ることをやめ既製品の評論家へと成長？」してしまう「時代の趨勢」を嘆いてみせる。

その一方、半導体技術によって、それまであまりにも高価だったコンピュータを、個人が「趣味」として使うことが可能になった。コンピュータのCPUそれ自体は、もはや設計者でさえ容易に介入できないブラックボックスだが、モジュール化された部品を組み合わせることで自作機を製作すること、高度なプログラミングを実践すること、あるいはアプリケーションを自在に駆使することを通じて、日ごろからコンピュータに関する知識を身につけ、技術を磨いていく人たちが増えていった。そうした嗜好を持った人びとがしばしば、オルタナティブメディアや市民メディアの活動を下支えしてきたことも忘れてはならない。

## 6. おわりに

コミュニケーション思想家のヴィレム・フルッサーは、情報を操作する脱産業社会の機械を「装置」と呼び、たとえ装置の機械的部分に介入できたとしても、もはやその新しい可能

性を発現できないことを示唆している。フルッサーは写真装置について、「写真を制作するようにプログラム化されており、それぞれの写真はその装置のプログラムに含まれたさまざまな可能性のひとつを実現したもの」に過ぎないと捉える (36)。それゆえ写真装置は一種のブラックボックス（黒い箱）だが、それにも関わらず、この箱の暗さこそが写真家にとって、まさに写真を撮る動機になるという。

写真家はプログラムにまだ発見されていない可能性をなんとかして探そうと努力します。彼は、装置を操作しあちこちに向け、その中を覗き込み、それを通して見ます。彼が装置を通して世界を眺めるのは、その世界が彼にとって興味を起こさせるからなのではなく、彼がさまざまな情報を作り出し、写真のプログラムを現実化する新たな可能性を求めるからなのです。(37)

装置に隠されている抜け道を明らかにしようとする行為を、チェスで新しい手を探し求めるプレイヤーに喩えるフルッサーは、装置やプログラムの裏をかいて、写真の持つ可能性をできるだけ多く現実化するように努めることが重要だという。そのためには、既知のものをあえて、未知のものとして読み替えなければならない。あるテクノロジーが潜在的に、新しい文化やリテラシーを生み出す可能性を秘めているのだとすれば、その発現の鍵を握っているのは、それを日常生活のなかで相対化し、たとえ筐体の内部に技術的に介入できなくても、その様態を編み変えていこうとするプレイヤーの存在である。

筐体への技術的介入に陶醉することを断念し、ブラックボックスを相対化する道筋のひとつを示しているのが、ワークショップという方法論の可能性ではないか。情報技術／メディアのあり方を刹那的に異化してみせる実践研究、その駆動装置としてのワークショップ。こうした営みのプレイヤーたちもまた、情報技術そのものの媒介的で中間的な性格を自覚したうえで、専門家と非専門家を媒介してみせる中間共同体たり得るという意味で、かつてのアマチュア文化のアクチュアリティを再生し得るのである。

注釈：

- (1) Silberstone, Roger 1981 *The Message of Television: Myth and Narrative in Contemporary Culture*, Heinemann Educational Books / Silberstone, Roger & Eric Hirsch 1992 *Consuming Technologies*, Routledge / Silverstone, Roger 1994 *Television and Everyday Life*, Routledge
- (2) Feenberg, Andrew 1999=2004 *Questioning Technology*, Routledge = 『技術への問い』直江清隆訳、岩波書店
- (3) Williams, Raymond 1974=92 *Television: Technology and Cultural Form*, Wesleyan University Press
- (4) Lessig, Lawrence 2000=01 *Code and Other Laws of Cyberspace*, Basic Books = 『CODE —インターネットの合法・違法・プライバシー』山形浩生・柏木亮二訳、翔泳社
- (5) 濱野智史 2008 『アーキテクチャの生態系 —情報環境はいかに設計されてきたか』NTT 出版
- (6) 東浩紀 2007 『情報環境論集 東浩紀コレクションS』講談社
- (7) 浅田彰・東浩紀・磯崎新・宇野常寛・濱野智史・宮台真司 2009 「[共同討議] アーキテクチャと思考の場所」東浩紀・北田暁大編『思想地図』3号、日本放送出版協会
- (8) ベック, ウルリヒ 1986=98 『危険社会 —新しい近代への道』東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局
- (9) クーン, トーマス 1962=71 『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房
- (10) 小林傳司 2004 『誰が科学技術について考えるのか —コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会
- (11) 金森修・中島秀人編 2002 『科学論の現在』勁草書房
- (12) 藤垣裕子 2003 『専門知と公共性 —科学技術社会論の構築に向けて』東京大学出版会
- (13) ヴィッカーリー, ブライアン C. 2000=02 『歴史のなかの科学コミュニケーション』村主朋英訳、勁草書房
- (14) 水越伸 1993 『メディアの生成 —アメリカ・ラジオの動態史』同文館出版
- (15) 東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編 2005 『メディアリテラシーの道具箱 —テレビを見る・つくる・読む』東京大学出版会
- (16) 飯田豊 2005 「今月の集中講義 メディア・リテラシー」『中央公論』2005年12月号
- (17) 水越伸編著 2007 『コミユナルなケータイ —モバイル・メディア社会を編みかえ

- る』岩波書店
- (18) 宮台真司が再帰的近代化論にもとづいて「恣意性からコミットメントへ」と呼ぶ、人文知の認識論的転回とも共振している事態といえよう。宮台真司 2009 『日本の難点』幻冬舎新書
- (19) 藤垣裕子 1995 「科学知識と科学者の生態学 —ジャーナル共同体を単位とした知識形態の静的分類および形態形成の動的把握」『年報 科学・技術・社会』4巻
- (20) Carey, James W. 1989 *Communication as Culture: Essays on Media and Society*, Routledge
- (21) 長谷川一 2003 『出版と知のメディア論 —エディターシップの歴史と再生』みすず書房
- (22) Marvin, Carolyn 1988=2003 *When Old Technologies Were New: Thinking About Electric Communication in the Late Nineteenth Century*, Oxford University Press = 『古いメディアが新しかった時 —一九世紀末社会と電気テクノロジー』吉見俊哉・水越伸・伊藤昌亮訳、新曜社
- (23) 吉見俊哉 1995 『声の資本主義 —電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社選書メチエ
- (24) 飯田豊 2005 「『放送』以前におけるテレビジョン技術社会史の射程 —昭和初期における公開実験の変容をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』67号 / 飯田豊 2005 「テレビジョンの『技術報国』 —1930年代における逓信省電気試験所の『テレビジョン行脚』」『情報学研究(東京大学大学院情報学環紀要)』68号 / 飯田豊 2007 「『テレビジョン』の系譜学 —放送(局)史を相対化する技術社会史からのアプローチ」日本放送協会放送文化研究所編『放送メディア研究』4号、丸善 / 飯田豊 2008 「テレビジョンとモダニズム —皇紀二六〇〇年の実験放送/国策展覧会をめぐって」『福山大学人間文化学部紀要』8巻、福山大学人間文化学部
- (25) ウィリアムズ, レイモンド 1980=2001 「生産手段としてのコミュニケーション手段」小野俊彦訳、吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房
- (26) Silverstone 1994 *ibid.*
- (27) Spigel, Lynn 1992 *Make Room for TV*, University of Chicago Press
- (28) Marvin 1988=2003 *ibid.*
- (29) 吉田光邦 1985 『改訂版 万国博覧会 —技術文明的に』NHK ブックス
- (30) 吉見俊哉 1992 『博覧会の政治学 —まなざしの近代』中公新書
- (31) 吉見 1995 前掲書
- (32) ポスカンザー, デボラ R 1996 「無線マニアからオーディエンスへ —日本のラジオ黎明期におけるアマチュア文化の衰退と放送文化の台頭」古賀林幸訳、水越伸責

任編集『20世紀のメディア (1) エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム

- (33) 水越伸 1999 『デジタル・メディア社会』岩波書店
- (34) 日本アマチュア無線連盟 編 1976 『アマチュア無線のあゆみ —日本アマチュア無線連盟 50年史』CQ出版
- (35) 小林信一 1998 「ブラックボックス化の図像学」嶋田厚・柏木博・吉見俊哉編『情報社会の文化3 デザイン テクノロジー 市場』東京大学出版会
- (36) フルッサー, ヴィレム 1983=99 『写真の哲学のために —テクノロジーとヴィジュアルカルチャー』深川雅文訳、勁草書房
- (37) フルッサー 1983=99 前掲書

#### 謝辞：

本稿は、平成 20～21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手スタートアップ）の助成を受けた研究課題「科学技術コミュニケーションの歴史社会学 —科学技術社会論とメディア論の接合に向けて」、平成 21 年度 MMS（武蔵メディアと社会）研究会の助成を受けた研究課題「科学技術コミュニケーションとメディア・リテラシー実践の位相に関する歴史社会学的研究」の研究成果の一部である。

## **For the Cooperative Work between “Science, Technology and Society Studies” and “Media Studies”**

Yutaka Iida

Nowadays, the information environment with Internet as its core is inevitably being restructured. In order to build an ideal relationship between information technology and media and human beings, the interaction channel, which acts as the medium between the sender and the receiver of media, experts and non-experts of information technology to make their collaboration possible, is essential.

However, “Science Communication” in the category of “Science, Technology and Society Studies (STS)”, and “Media Practice” inspired by “Media Studies” or “Cultural Studies”, though share common interests, are developed on different academic paradigm until today. The integration of both in regards to theory, more importantly, practice ought to be given the top priority.

This paper presents the importance of finding the common ground of this two trend from a historical sociological point of view and conceiving a comprehensive conceptual frame.

[Keywords] STS (Science, Technology and Society Studies), Media Studies, Science Communication, Media Practice